

国際的アカデミックコミュニケーション能力の育成に向けて
アカデミックリテラシー&プレゼンテーションの授業過程と成果に関する報告

DEVELOPMENT OF INTERNATIONAL ACADEMIC COMMUNICATION ABILITY

Review of Process and Effect of Academic Literacy and Presentation

ラッダ 政美 芸術工学教育センター 教授
曾和 英子 芸術工学部プロダクト・インテリアデザイン学科 非常勤講師

Masami RODDA Center for Art and Design Education, Professor
Eiko SOWA Department of Product and Interior Design, School of Arts and Design, Adjunct Instructor

要旨

本学の大学院で開講されている必須科目の Academic Literacy & Presentation (以下 ALP と略す) は、本学の大学院生が、アート・デザイン領域の研究に必要な基本的なアカデミックリテラシーを身につけると同時に、最終成果としてパワーポイントを使った英語での研究プレゼンテーションを課題とし、国際的なアカデミックコミュニケーション能力を育てることを目的としている。2020 年度から新たに English Presentation として科目名が変わるのを機に、最終年度の2019 年後期の ALPI に主に焦点を当て、この授業の過程と成果を見直し、今後のあり方についての探求をまとめた。

Summary

The purpose of Academic Literacy & Presentation (hereinafter abbreviated as ALP), a required subject of our graduate school, is that the students nourish their international academic communication ability by acquiring basic academic literacy necessary for research in the area of art and design, and then presenting their research assignment using Power Point. Since the subject name changed into English Presentation in 2020, this paper reviews the process and effect of ALP and suggest the future issues mainly focusing on ALP I during the second semester in 2019.

1. はじめに

神戸芸術工科大学大学院芸術工学研究科は、修士課程の総合アート&デザイン専攻と博士後期課程の芸術工学専攻で構成されており、「科学と技術」「人間と歴史」「芸術と文化」が融合する「芸術工学」に基づき「分野別科目」と「分野融合型科目」を中心としたカリキュラム(2019年度まで)を実施している。なお、芸術工学研究機構と連携するプロジェクト科目により、社会的課題解決のための活動や国際的フィールド調査研究も進行し、海外での作品展示や研究発表も行なっている。

大学院生の制作活動や学術活動が、より国際的に幅広く展開できるよう支援するために、本学のアカデミックリテラシー&プレゼンテーション(Academic Literacy & Presentation、以下ALPと略す)の授業は、「国際科目」の区分として実施してきた。授業目的は、アート・デザイン領域の研究に必要な基本的なアカデミックリテラシーを身につけると同時に、最終成果としてパワーポイントを使った英語での研究プレゼンテーションを課題とし、国際的なアカデミックコミュニケーション能力を育てることとする。

ALP Iは修士課程の必修科目として、履修生は修士1年生が中心となり、修士2年生と博士課程生も履修可となっている。ALP IIはALP Iを履修した学生を対象とした選択履修科目であり、より高度な英語での発表能力を身につけることが求められる。

2018年度までの授業は、日本語によるアカデミックリテラシー指導と英語の発表指導を、前後に分けて1:2の割合で行なった。しかし、研究構成や知的財産権、パワーポイントの作成要領、概要集フォーマットの活用要領など、アカデミックリテラシーの諸内容について、4・5回の授業時間では十分に伝えることが難しいことが問題点となった。

そこで2019年度は、全15回の授業を通して、芸術工学研究を専門とする教員と、英語によるライティングとプレゼンテーション指導の経験があり、英語教育を専門とする教員が共同で指導を行なうこととなっ

た。

2019年度の本学大学院修士課程の入学人数は合計50名である。ALP Iは大学院の必修科目であるため、これら修士1年生の50名の全員が履修する必要があり、他にも修士2年生と博士課程の学生も履修可能である。予想される履修生の数と、履修生が複数の研究分野の学生であることを考慮して、前期と後期の2回に分けて対応することとなった。本稿は、2020年に科目名がイングリッシュプレゼンテーションに変更されることを機に、2019年度の前期と後期のALP Iの授業を通して行なった取り組みについて見直し、芸術工学分野における、アカデミックリテラシー&プレゼンテーション教育の今後のあり方についての探究をまとめた。

2. 授業概要

2.1. 多分野の履修者

前期授業の履修者は、修士1年生が32名、修士2年生が4名、博士課程1年生が1名、合計37名となり、専攻分野を本学の学部の学科に対応させると、環境デザイン学科7名、プロダクト・インテリアデザイン学科4名、ビジュアルデザイン学科15名、まんが表現学科1名、ファッションデザイン学科1名、アート・クラフト学科9名という構成である。

全15回の授業を英語の専門教員を含み、3名の教員が共同で担当した。アカデミックリテラシーの諸内容については、アート&クラフトを専門とする教員が作品についての記述やプレゼンテーションについて、デザインリサーチを専門とする教員が研究構成や、文献検索、概要レジュメの書き方について指導を行なった。

後期授業の履修者は、修士1年生の18名から構成されており、同じく専攻分野を本学の学部の学科に対応させると、環境デザイン学科9名、プロダクト・インテリアデザイン学科1名、ビジュアルデザイン学科4名、まんが表現学科2名、ファッションデザイン学科1名、アート・クラフト学科1名である。

表1 2019年度ALP I後期授業スケジュール

日程	技術・作法についての指導	英語についての指導
1 9/24	【講義】課題説明、大学院で進める <u>研究とは？</u> 研究発表の構成 【演習】研究タイトル、内容記入	【演習】自分のプロフィールを書く。コミュニケーションゲームを通じてクラスメートのことを知る。
2 10/1	【演習】自分の過去の研究に関連した画像を持ち込み、研究構成ワークシートに記入・提出	【演習】自分の専門について書き、発表する。プレゼンを通してクラスメートの専門について知る。
3 10/8	【講義】研究構成ワークシートフィードバック： 研究分野別の <u>本論のまとめ方</u> を理解する。 【演習】概要原稿（日本語）作成・提出	【講義】英文原稿の書き方注意。 英文作成の基本を学ぶ（英文の構成・5文型）。
4 10/15	【講義】発表原稿についてのフィードバック： 結果と考察の違い・ <u>結論の書き方</u> を学ぶ。 【演習】概要原稿（日本語）修正・提出	【講義】punctuation (1) ピリオド・疑問符・感嘆符の使い方
5 10/29	【講義】文献比較を通じた自分の研究の位置付け、 <u>序論における研究の背景と目的の書き方</u> 。 参考文献の書き方 【演習】個人面談、概要原稿（日本語）修正	【講義】punctuation (2) コンマ・コロン・セミコロンの使い方
6 11/5	【講義】概要集フォーマットのレジユメの作成要領 【演習】概要集フォーマットに合わせてレイアウト	【講義】punctuation (3) ダッシュ・引用符・アポストロフィ・スラッシュの使い方
7 11/12	【講義】概要レイアウトフィードバック パワポ作成要領 【演習】パワポ作成	【演習】個別添削（原稿）1 英文概要原稿をチェック。
8 11/19	【講義】パワーポイントフィードバック パワポに活用する図表の作り方を学ぶ。 【演習】パワポ修正・パワポ原稿（日・英）作成	【演習】個別添削（原稿）2 英文概要原稿をチェック。
9 11/26	【講義】国際学会での発表・ 概要レジユメとパワポ発表原稿の違い 【演習】パワポに合わせた発表原稿（英語）完成	【演習】個別添削（原稿・パワポを含む）1 パワポの英語をチェック。
10 12/3	【講義】発表原稿のフィードバック・著作権関係	【演習】個別添削（原稿・パワポを含む）2 パワポの英語をチェック・完成
11 12/10	【演習】パワポ最終チェック・ <u>発表対象を意識した発表態度</u> を学ぶ。	【演習】英語発表に関する注意点 英語のストレス・イントネーション・リズムを分析しながら、英文の発音練習をする。
12 12/17	【演習】グループ別リハーサル 最終提出物チェック：概要（レジユメ）・パワーポイント・発表原稿（日英）	
13, 14 12/24 1/7	【演習】口頭発表（英語） 英語での発表・質問対応を体験する。	
15 1/14	【総評】まとめ もらったコメントを参考に次回への課題を発表する。（グループ別でもOK） 発表体験・コメントを反芻し、次回の発表につなげる。	

後期の授業は、英語についての指導は前述の英語教員が、日本語による原稿作成やプレゼンテーションの指導は、同じく前述のデザインリサーチを専門とする教員が、全15回の授業を分担して行なった。

履修生は複数の専攻分野の学生で構成されており、本授業では、専門分野の垣根を超えた、より広い視野でのアカデミックコミュニケーションを身につけることを目指した。

2.2. 授業課題

授業課題は、前期では「自分がこれまでに関わった研究課題や制作課題を1つ取り挙げ、英語で3分間のプレゼンテーションを行なう」ことにした。大学院に入学したばかりの4月に発表テーマの設定が行なわれたため、多くの学生が大学での卒業制作や卒業論文を発表テーマとした。

後期も、前期同様に「自分がこれまでに関わった研究課題や制作課題を1つ取り挙げ、英語でプレゼンテーションを行なう」ことを課題とした。しかし、プレゼンの時間は、後期の学生数が減ったことから、前期の3分間の発表時間を少し伸ばして4-5分間の発表とした。後期は大学院の研究課題に取り組んで半年経っていたので、ほとんどの学生が大学院での研究課題を発表テーマとした。

2.3. 授業スケジュール

「国際科目」として位置付けられたこともあって、本授業はアカデミックリテラシーの技術・作法についての指導と、英語プレゼンテーションに関する語学的指導を組み合わせたプログラムとなっている。具体的な授業内容とスケジュールは、表1のようにまとめ、初回授業の際に履修生全員に配布し、授業内容と進め方を共有した。

3. 指導内容と効果

本授業は、多分野の学生が履修している点とコミュニケーション力の向上を目的としている点から問題解決型学習(PBL)手法を取り入れたアクティブラーニングに力点を置いた。

3.1. 研究と学習の違い

まず、履修生たちに研究の進め方についての感想を聞いてみたところ、前期と後期のいずれの履修生においても、「研究」という言葉に距離感を感じる学生が多かった。そこで、本授業は、「研究」とはなにかということから、話を進めることにした。

「研究」は「学習」と大きく異なる。「学習」は既に明らかにされたことを学ぶことであり、「研究」はまだ明確になっていないことを明らかにすることである。

本学の大学院は芸術工学を研究領域としており、実際に制作した作品を成果物とする学生が多い。しかし、モノに形を与えるための技術学習だけではない。モノと生活環境との関係性を探究し、モノのあり方についての独自の見解を導き出すことこそ、大学院の目標であり、そのためには、一早く「学習」と「研究」の違いを理解し、独自の「研究」視点を確立することが大変重要である。

3.2. 研究の基本構成について

「研究」視点を確立してもらうため、本授業は「制作技術の学習」から「作品制作を通じた探求」に向けたマインドチェンジを図った。

「序論」「本論」「終論」からなる基本構成とそれぞれの記述内容について解説し、研究構成ワークシートに記入してもらった(図1)。ワークシートの簡単な記述を通して、アカデミックリテラシー作法に従った発表の流れをはっきりさせた。記入内容については、具体的なコメントを加え返却した。

次のステップとして800字の発表原稿を作成してもらった。研究構成ワークシートだけでは、研究の具体的な内容が伝わってなかったこともあって、もう一度具体的なコメントを加えて返却し、研究の独自性を再考した上で、全般的な修正を行なってもらった。

修正原稿は、概ね研究構成の作法に従った表現になったものの、研究の独自性と本論記述の論理性が問題になった。以下、「序論」「本論」「終論」のそれぞれの部分における問題点または指導ポイントについてまとめる。

研究構成ワークシート	
氏名 _____	
研究課題: _____ 研究内容が分かるように20字以内で表現	
序論	
◇問題設定(研究背景):	
◇研究目的・方法:	
本論	
◇その課題解決に向けて、具体的に何を実施し、どのようなことが明らかになったのか?	
1) _____	
2) _____	
3) _____	
終論	
◇研究分析を通して明らかになった結果に対する自分の見解	
◇今後の課題	

(図1)

① 序論の部分

序論は研究背景と目的を書く部分である。環境デザインやプロダクト・インテリアデザインなどの分野では社会的課題解決を研究の目的とすることが多く、社会的課題についての問いかけが研究背景となる。一方、アート・クラフト学科や一部のビジュアルデザイン学科、ファッションデザイン学科、まんが表現学科の研究分野では、世界観や美的感性の表現、または制作技術の可能性への探究を目的とする場合が多い。特に、後者の研究においては、作品が目指している世界観や美的感性について、研究背景に記述する必要があるが、多くの学生のこの部分についての記述が不十分である。その理由として、多くの学生が先行研究についての検索・閲覧が不十分である点が考えられる。

② 本論の部分

本論は自分の研究内容を論理的に記述する部分である。履修者が授業の発表のために設定したテーマは前

期と後期で異なり、前期の場合ほとんどが学部の卒業課題を、後期の場合は大学院で取り組んでいる課題を選んだ。前期の学部の卒業課題はすでに完成した課題についての発表であるので、完成した作品や調査分析の結果を持っている。後期は大学院で取り組んでいる課題を取り上げた学生が多く、まだ文献検索・フィールド調査を行なっている段階、または制作技法の検討・試作段階で、最終成果物は完成されていない。つまり、中間報告として発表してもらうことになる。

いずれの場合も、実施内容についての記述に戸惑っている学生が予想以上に多く、特に研究メソッドやプロセスについて、論理的に記述できる学生は半分以下に過ぎない。

本授業は、学術的な論文作成や発表の技術・作法についての指導が目的であり、研究メソッドの指導を目的とするわけではない。しかし、研究メソッドの違いにより、研究のまとめ方も異なるため、本授業は、以下の3つのグループに分けて指導を行なった。

(A) 作品表現研究:

制作技法を身につけ世界観や感性の表現に重点を置く研究であり、アート・クラフト学科やファッションデザイン学科、ビジュアルデザイン学科、まんが表現学科に多く見られる。このタイプの研究は、表現したい世界観や美的感性に適した技術や手法を検討する。本論の部分は、制作プロセスに着目し、これらの手法と感性表現の有効性を検証する。

(B) デザイン提案研究:

アンケートやフィールド調査、事例調査を通してコンセプトを見つけ、そのコンセプトを伝えるデザインモデルを提案する。プロダクト・インテリアデザイン学科、環境デザイン学科の学生によくみられる研究であり、社会的な問題点についての解決方法を見つける研究である。研究プロセスは、研究対象の設定→調査の実施→分析→コンセプト抽出→デザイン提案など、比較的複雑であり、それぞれのプロセスのメソッド、次のプロセスとの因果関係などを含めると、記述すべき内容が比較的によく多角的である。このタイプにつ

いては、全文を通して論理の一貫性を保つことに重点を置いて指導を行なった。

(C) 調査分析研究：

AとBタイプは作品を最終成果物とするが、このCタイプは論文を最終成果物とする。本学の大学院には論文執筆者が少なく、2019年度の履修者の中には環境デザイン分野の学生2名とビジュアルデザイン分野の学生が1名いるだけである。具体的には、事例収集・分類・分析を通して各タイプの特徴を探る研究や、地域資源活用や地域活動、伝統技術などについて分析し持続的継承のあり方について提案するなどの研究があり、研究メソッドへの解説や独自の視点について、具体的に説明する必要がある。

本論は必ず具体的に、論理的に、一貫性を持って記述しないとイケない。しかし、多くの学生にとって論理的な記述が難点になっている。本授業では、まず、上記のように3つのグループに分けて、それぞれの基本的な発表の流れについて解説し、発表原稿を作成してもらった。次に、前期は履修生が多数であったためできなかったが、後期には履修生全員の発表原稿について、2回に渡って詳しいコメントを作成して配布し、原稿修正の方向性を示した。なお、コメントだけでは伝わらない部分については、個人面談を通して1対1で学生と一緒に考えを整理してまとめることで、各々の研究に歩み寄った指導を心がけた。

③ 結論の部分

結論は研究を通して明らかになった結果についての自分の見解を示す部分であり、それに基づいて今後の課題も述べる。研究成果報告にとって結論は大変重要な内容になるが、研究構成ワークの段階では、「特に結論はない」と書いた学生や何も書けなかった学生は約2割を占めた。特に作品制作系の学生の多くは、作品自体が結果であるとの考えから、その作品についての考察を書くことに戸惑ってしまう。

しかし、学生全員が実際に研究目的は書けているので、各自の問題意識または表現したい概念をしっかりと持っている。授業では「研究目的と照らし合わせな

がら実施した調査・作品制作を見直す」ように指導していく中で、すべての学生が、自分の「発見」と「今後の課題」を見つけ、結論を完成することができた。

3.3. 研究構成ワークの効果

15回の授業が終了した後、履修者全員に授業効果と感想を書いてもらい、今後の授業改善に向けた課題を検討した。この章ではアンケート結果を踏まえて後期授業効果について分析する。

授業の感想文では、以下のような声を確認することができた。

- ・研究構成の指導により、流れが分かりやすくなった。
- ・これからの研究の方向性がよく分かった。
- ・より問題意識を持つようになった
- ・研究内容の全てではなく、伝えたいことを選んで構成することが重要だと強く感じた。
- ・資料検索の方法(論文や雑誌など)、概要のレイアウトのルールを習得した。
- ・研究すること、調査することについて勉強になった。
- ・自分の研究を振り返り、発表方法と内容のブラッシュアップができた。
- ・発表原稿文の添削が特に自分のためになった。実際自分が書いた文について、間違いやすい傾向を指摘してもらって、注意すべき点が把握できた。
- ・発表を通して、自分の研究の論理が通じない点を見つけることができたので、今後直していきたい。
- ・前期でこの授業内容を履修したら良かった。(2名)
- ・見直し用にパワーポイントや論文構成などの授業内容を資料として配布してほしい。

総じて、研究の流れと構成、先行研究閲覧の意味、研究における問題意識の重要性について理解してもらえたと考える。後期の個別添削は、大変有効であったことも窺えた。また、発表においては、主軸に沿った内容を精査し論理的に構成していく必要性を理解してもらった。

4. スライドの作成について

現在、ほとんどの学術交流の場において口頭発表は、

パワーポイントなどのスライドを使ってプレゼンテーションをする。

履修生の中にはすでにスライドを作成した経験のある学生もいるが、まだスライドを使ったことのない学生もいる。そのため、本授業は、パワーポイントソフトの操作入門についての解説を手短に取り入れながらも、作成経験のある学生にも有用な「発表のストーリー構成」と「見せるスライドの作成テクニック」についても解説を行なった。

4.1. スライドのストーリー構成について

パワーポイントの構成は基本的には研究構成と同じであるが、それぞれの研究課題によって、研究背景、目的、概念の説明、研究対象、研究方法、実施内容、結果、まとめ(考察)、今後の課題などの項目から、必要な内容をピックアップし、発表時間に合わせてストーリーを構成していく。

また、発表内容で重要なキーワードに対して、聞く人にどれくらいの知識があるのか、背景を理解しているのかなども考えながら、「聞く相手」に伝えようとする気遣いが重要である。重要な専門用語や、特定の地域名などについては、特に「聞く相手」に配慮し、自分の研究における用語の定義や場所の範囲などを、はっきり伝えるよう、心がけてもらった。

本授業では、2回目の授業に成果物の写真を持ってきてもらい、発表原稿の作成作業を行ない、教員はその写真に基づいて原稿作成の指導を行なった。

正式なパワーポイントスライドの作成時期については、前期と後期で少しその発表原稿に基づいて作成するように指示した。前期と後期で少し流れを変えたので、それについて報告する。

① 前期の場合

スライドの作成については、前期には日本語で研究構成ワークシートの作成→フィードバック→800字の発表原稿を作成→フィードバック→一部個人面談による修正→**スライドの作成**→フィードバック→スライドと発表原稿の英訳→英文チェック・修正→英語による口頭発表の流れで進めた。

教員は、作品などの成果物の写真と研究構成ワークシートを参考に、履修生の発表概要を把握し、研究内容について論理的な説明ができているのかをチェックした。スライドは、その発表原稿に従って構成してもらった。

しかし、この流れだと、スライドを提出してもらって初めて学生の発表原稿とスライドとのズレを見つけ、発表原稿の変更を提案することもあった。そのため、一部の学生には予想しなかった発表原稿の再修正の作業が生じてしまい、次のステップである英訳の作業に遅れを生じさせてしまった。スライド作成の流れについては、少し改善すべきだと考えた。

② 後期の場合

後期は前期の経験を踏まえて、発表原稿の作成に合わせて、スライドも同時に作成し、提出してもらった。つまり、日本語で研究構成ワークシートを作成→フィードバック→800字の発表原稿・**スライドの作成**→フィードバック→一部個人面談による修正→フィードバック→スライドと発表原稿の英訳→英文チェック・修正→英語による口頭発表の流れに変更した。

発表原稿とスライドを一緒に作成することで、教員にとっても、学生の研究テーマをよりの確に把握する手助けとなり、発表ストーリーの構成をより早くチェックすることができた。

4.2. 「見せるスライド」のデザイン

スライドの活用において、初心者の場合、発表原稿が先にできていたら、どうしても発表原稿の文章をそのままコピー&ペーストしてしまうことが多い。本授業でも、多くの学生にそのような傾向が見られた。特に留学生などは、発音に自信がなく、発表原稿の文章をそのまま画面に映し出して、読んでもらおうとする。しかし、パワーポイントは決して発表者の都合で作るのではなく、それを「見る相手」の都合に気を配るべきであることを忘れてはならない。

本授業では、スライドの作成ポイントについて、以下の要点について伝えた。

① タイトルスライドの構成

発表の顔であるタイトルスライドでは、研究発表のタイトル、発表者の名前と所属などを紹介する。場合によっては、発表会名や日付などを加えることもある。

これらの項目の中で、「タイトル>発表者の名前と所属>発表会の名前>日付など」の順で重要度が高い。重要度の高い項目は文字や色に工夫して目立たせ、重要度の低い項目は思い切って小さな文字にする。

横書きの場合、人の目線は左端から始まる。タイトルと名前だけであれば全て中央揃えでもいいが、発表会名や日付など項目が増えた場合は全てを左に揃えた方が分かりやすい。

② コンテンツスライドの構成

・見出し：スライドの見出しは、現スライドの位置付けと内容を示すものにする。例えば、「背景：車椅子高齢者の移動の問題」では、「背景」が現スライドの位置で、「車椅子高齢者の移動の問題」がスライドの内容であり、これによりスライドの位置と内容を伝える。

・スライド1枚に1つのトピック：コンテンツスライド1枚の情報量は、人や内容によって様々なスタイルがあるが、本授業の発表では1枚のスライドで1つのトピックに絞るよう指示した。

③ 「見せるスライド」のデザイン

文字資料とは異なり、スライドは「読む」というより「見る」資料である。スライドは発表の視覚的な補助であり、重要なことを簡潔に書くだけでいい。「見せるスライド」のデザインについては、以下のことを具体化し、それを基本に差別化を図るように指示した。

・文字サイズ：見出しや強調部分は大きく(32pt以上)太く、本文は遠くからでも読めるくらいの大きさ(20pt-32pt)にする

・フォント：認知しやすいフォントを使う。和文はゴシック体、英文はArialが多く使われている。

・文字量：負担なく内容確認できるのは、スライド1枚に10行以内；箇条書きなら5項目までが好ましい。

・行間：パワーポイントの初期設定では行間が狭く感じるがあるので、行間を広げると(1.2-1.5倍)、

一行一行が明確になり、文字を目で追いやすくなる。

・色数は2-3色：スライドはプロジェクターを使ってスクリーンに投影するため、彩度と明度の高い色は明るくなりすぎると、見づらくなる。また、黄色や黄緑などは、白背景では色が飛んでしまうことがある。全体的に、彩度を落とし、落ち着いた色を使うといい。色数は、スライドの背景に「主色」を、強調したい箇所に「強調色」を使い、2-3色の組み合わせがシンプルで見やすい。なお、スライドの内容別に異なる「主色」を使うと、より発表内容の構造を明確にさせる効果が得られる。

・上下左右を揃えて配置：スライドに複数の要素や写真が含まれる場合、グリッド(黄線)を意識して個々の要素を秩序よく配置する。多くの場合、左側と上のラインを揃えると美しく仕上がる。

・図表を活用：スライドは見る資料であり、発表者は口頭で説明をしているものなので、図を入れることで発表内容を補足する。

4.3. スライド作成についての指導の効果

授業の最終回に行なったアンケートでは、スライド作成の指導について、以下の感想が寄せられた。

・発表原稿に対して、スライドをどのように使えたら良いか、詳しく教えてもらった点、今後に活かそう。

・「見せるスライド」の講義はとても良かった。言いたいことを全部入れてしまっていたが、聞き手にはとても分りにくいということが分かった。

・スライドを作るポイントが詳しくなった。

・スライドをより簡潔に分かりやすく表現する方法を学んだ。(5名)

・スライドは「読ませる」のではなく「見せる」資料だと、理解できた。

・スライド制作において、図の量と文字数などのアドバイスは良かった。

・プレゼンの仕方を学んだこと、勉強になった。

・発表についての様々なわざを学んだ。

・良いスライドの作り方が分からなかったが、先生の個別指導が本当に良かった。これからのプレゼンター

ションに自信を持てるようになった。

・聞く人にわかりやすいスライド、話し方に気を付けること。

総じて、スライド作成について、「見せるスライド」のデザインについての指導は、多くの学生に伝わったと思われる。なお、必要なだけの内容を厳選して簡潔にコンテンツを構成することの重要性についても、多くの学生が理解できたことがわかる。なお、特に「コンテンツ構成」についての指導は、それぞれの履修生のテーマが異なるため、個別指導が有効であったことも窺える。

5. 英語によるプレゼンテーションについて

本授業は、国際科目として設定されたので、英語によるコミュニケーションの向上がその大きな目標となる。前半の授業は、英語の専門教員により、英語の作文に必要な基礎知識の復習を行ない、発表原稿とスライドの英語版が完成した後は、研究キーワードのチェック、および発表原稿やスライド文についての個別添削を行なった。

5.1. 履修生の日常の英語の運用度について

まずアンケートを実施し、履修生の英語の日常の運用度と英語力の自己評価を調査した。

その結果、英字新聞を読んでいる学生は18名中0%であった。また8割以上の学生が、日常で英語の雑誌や小説を読んだり、英語のニュースを聞いたりしていないし、授業以外で英語で話す機会も持っていなかった。ただ英語の映画やドラマを日常的に視聴している学生は83%おり、その約半数が週に2-3時間を費やしていた。

ライティングに関しては、授業以外で英語を書く機会がある履修生は0%であった。ただし86%の学生がパラグラフライティングやトピックセンテンスなどについて学んだことがあると答え、7割以上の学生が、4パラグラフ以上の英文を書いたことがあると答えたので心強かった。

英語力の自己評価について問うと、全員が文法は苦

手な分野だと答えた。また1人を除いて17名が、字幕や翻訳なしでは英語の映画やドラマ、ニュースや歌の内容の理解度は30%以下と答えた。

授業以外で普段、英語の読み書き、そして話す機会は全くなく、文法に自信がないというのが履修生の現状であった。

5.2. 履修生の英語力判定

修士課程は、博士課程のように入試に英語が含まれていないので、履修生の英語力を前もって把握しておくことができない。そこで最初の授業の日に、履修生に英語で50 words程度の自己紹介を書かせた。

自己紹介には名前を含めないことを条件にし、名前が伏せられた自己紹介文をクラスでランダムに配り直し、質問形式で、履修生はその自己紹介文の本人を見つけ出すゲームを行なった。これは、初めての授業でお互いを知ることが目的としており、学生たちは協力して質問し合い、自己紹介文の作者探しを楽しんでいた。

以下が、履修生が自己紹介文を書く時に当たって書きやすいよう誘導した質問である(図2)。

1. Where were you born?
Where do you live?
Who do you live with?
2. How many brothers and sisters do you have?
3. What's your hobby?
4. What's your favorite book / movie / song / TV Program / baseball team / soccer team?
5. Who's your favorite writer / singer / actor / athlete?
6. Do you work part-time or full time?
What do you do?
How often do you work?
7. What would you like to achieve at KDU graduate school?

(図2)

続いて履修生に、本題である自分の専門について150 words程度の紹介文を書かせた。以下が、履修生が英作するに当たって書きやすいよう誘導した質問である(図3)。

- | |
|---|
| <p>1. Write about your major (what you mainly studied) in the university.</p> <p>2. When and how did you become interested in your present field?</p> <p>3. What and how would you like to develop your research / work at KDU graduate school?</p> |
|---|

(図3)

以上の英作文で履修生の英語力を審査し、個別指導での添削の参考にした。このALPIは修士課程の必修科目だったので、今後博士過程の入試だけでなく、修士課程の入試でも英語を導入することを提案する。

5.3. 英語の Punctuation 学習について

5.1 で履修生に書かせた2つの英作文からわかるのは、履修生の英語運用能力にかなりの格差が見られるということだ。日本人、留学生を問わず、英文の基本構造を把握しておらず、英文(S+V)として成り立たない意味不明の文を書く学生もいれば、語彙も豊富でしっかりした文法知識を持ち、かなりの量の英文を難なく書ける学生もいた。

しかしながら全員に共通する問題として、句読法を正規に学んでいない学生が多く、英文をしっかり書くことができる学生の中でも、コンマを引用符の外に置いたりするなど句読点の間違った使い方が目立った。またほとんどの履修生が、コロンの、セミコロン、ダッシュなどの使い方を知らなかった。そこで、英文の発表原稿とスライドを作成するまでの基本演習として、句読法を中心とした講義と演習を行なった。

5.4. 英語についての指導効果

以下が、アンケートの自由記述で履修生が記した英語の指導についての内容である。

- ・英語に触れられる機会が少ない中、英語の授業は楽

しかった。(2名)

- ・自らの研究を英文にすることで、自分のスキルがどの程度なのかなど、目に見える状態で学習に取り組めた。

- ・研究発表内容を英文に翻訳することで、言葉の意味を再確認する機会となった。

- ・英語で文章を書くことを続けたい。

- ・原稿を読むのではなく、原稿を暗記して発表することを目指したい。

- ・時間が足りないと感じた。リテラシーの授業と英語のプレゼンテーションの内容を2限に分けた方がよい。

(2名)

- ・自分の研究関連の英文の構成や言い回しなどについて深堀りしたい。

- ・実用的な英語をもっと勉強したい。

自分の研究概要を英語に書き換えることで、これまで日本語だけでは見えてこなかった曖昧な箇所や疑問点が出てきたようだ。英語は具体性を求める言語なので、日本語の説明で曖昧になっていた箇所も説明しなくてはならない。このプロセスを通じて、履修生たちは、自分たちの研究概要をより具体的に詳しく説明することが求められ、それに対応することで、内容がよりわかりやすくなっていった。

また普段触れていない英語と対峙することで、英語に対する興味がわき、今後の英語学習に意欲を見せる履修者もいた。

5.5. 発表の姿勢についての指導効果

以下が、発表の姿勢に関する指導について、アンケートの自由記述で履修生が記した内容である。

- ・発表を聞きながらその場で質問を考えたり、質問に対してスムーズに答えられなくて大変だった。

- ・慣れてない言語は、発表する際にタイムオーバーしやすいことが分かったので、今後は単語一語一語の発音を確実に読めるようにする。

- ・自然な英語で自ら発言できるようにしたいと思った。

- ・英語プレゼンテーションというめったにない経験ができて良かった。すごく勉強になった。(2名)

- ・他の人の発表を聞いて勉強になった。
- ・プレゼンの回数が少ないと思った。
- ・口頭発表のときの注意点を教えてもらった。
- ・発表の基本姿勢を学び体験することで、次の発表につなげる経験ができた。
- ・口頭発表の間の取り方が分かった。

2019年度はALPIが前期にも開講されていたので、その時の優秀な発表者2名を招き、モデルとして授業で披露してもらった。これは、履修生がプレゼンテーションの最終の形をイメージするための参考にしてもらった。また実際の発表の一週間前にリハーサルを行い、他の履修生からのコメントを募った。コメントはその場で発表者に伝え、本番までの課題とした。

総じて、英語による口頭発表を自分たちに必要な経験とみなし、積極的に取り組もうとしていることが窺えた。

6. まとめ

6.1. ALPの授業で学んだこと

履修者の最終提出物と発表、授業について感想を聞いて、本授業が以下の効果を上げることができたと考える。

1) 研究構成の理解: 研究概要文の作成とパワーポイントによる口頭発表のいずれの場合も、序論・本論・結論の3つの部分で構成する必要があることを理解し、そのような書き方ができるようになった。

2) 日本語と英語表現について: 作品を最終成果物とする学生の多くは、制作した作品が全てを語ってくれると思う傾向があったが、本授業を通して、作品やデザイン提案の特徴を、言葉で表現する意味を理解した。さらに、日本語だけではなく、英語で表現する過程を経て、また新たな視点で自分の研究を再考する機会となった。

なお、作品の制作プロセスやコンセプト抽出プロセスを分析し、研究の視点から自分の作品を客観的に評価し、考察することを理解した。

3) 発表の意図性: 自分の研究を他人に伝え、他の人の

発表を聞くことの意味について理解した。

6.2. 前期履修と後期履修の意味

前期の履修生は、ほとんどが学部での卒業制作をまとめて発表している。「研究」という視点から、卒業制作を振り返ることにより、新しい学びがあったと思われる。特に、先行研究と比較することで、その社会的意味とオリジナリティーを見つけ、今後の研究につなげる機会になったと思われる。

後期の履修生は、すでに半年の間、指導教官の指導を受けながら調査分析または作品の試作を進めてきたので、ほとんどが大学院で進めている研究を取り上げた。本授業は、アカデミックリテラシーの立場から、研究内容をどのように伝えるのかについての指導であることをはっきり伝え、研究の進め方については指導教官の指導に従うよう、あらかじめ履修者に伝えた上で、研究構成や研究内容の論理性などについての指導を行なった。また、発表の姿勢についての指導を通して、今後の研究の進行、および指導教官とのアカデミックコミュニケーションをより潤滑に進めることが期待される。

6.3. グループ指導と個人指導について

前期履修生が37名、後期履修者が18名という状況の中、前期は主にグループ指導を取り入れており、後期はグループ指導と個人指導を組み合わせで行なった。

グループ指導は、本学研究分野における研究メソッドを大きく「作品表現」「デザイン提案」「調査分析」の3種類に分類し、研究タイプ別に序論・本論・結論の構成要領を具体的に解説することで、「研究」とはなにか、そのためのアカデミックリテラシーはどうあるべきかについて、容易に理解してもらうことができた。

しかし、グループ指導では大きな研究構成については理解してもらうことができたものの、個人の研究内容を論理的に表現することが苦手な学生の指導が行き届かない。

後期授業で取り入れた個人指導は、1人1人の発表原稿とスライドに対する具体的なコメントを書いて

フィードバックし、必要に応じて1対1の面談を取り入れることにより、発表内容の論理性についての補足指導が可能になった。研究の論理性を見つけた時、学生らが研究の楽しさを感じたと喜んでいた姿は、このような細やかな指導の意義を強く感じさせてくれた。

6.4. 今後の課題

1) 資料検索指導: 研究発表において、その研究のオリジナリティーを正しく理解することは、大変重要なことである。多くの学生の発表には先行研究についての検索・閲覧が欠けている。図書館やネットを活用する方法を身につけてもらうことが1つの課題となる。

2) 研究内容の論理的解説: 研究成果を論理的に構成することが苦手な学生は、まだ多いかと思われる。基本的な研究メソッドを身につけることは、指導教員とのコミュニケーションをより潤滑にする道となる。本授業は、調査方法やデータの分析・整理方法についての指導時間は設けてないが、1年生前期に研究メソッドについて基礎教育を行なう必要性を感じる。

3) 英文添削の個別指導: 添削は一度で済むものではない。学生は、指導教員の添削を鵜呑みにするのではなく、自分の主張したい内容に英文が沿っているかどうかを各自で再検討する必要がある。そのためには何度も指導教員と話し合う必要がある。これは30名を超すクラスサイズでは到底無理で、2020年度からは、英語の指導教員を1名増やすことを提案し採用された。

4) 発表の個別指導: 履修生全員の英語の発音・イントネーション・リズムを個別に指導するのは、英文添削と同様、1人の指導教員では限界がある。そこで、授業外でGlobal Caféのネイティブの職員にチェックしてもらうことを奨励した。今後は、Global Caféとも組織的に連携し、授業外で学生が必ずネイティブチェックを受けるように指導する必要がある。

参考文献

- 1) 神保尚武他、『効果的なパラグラフの書き方』、南雲堂、2008
- 2) 和田朋子、『はじめての英語論文』、すばる舎、2013
- 3) Talandis, J., "Writers' Workshop," in The

Language Teacher, 44(4), 2020, pp.44-47